

音楽の諸要素と向き合わせることをめざした 新しい視点からの学習指導案モデルの開発

—小学校学習指導要領（音楽）の「共通事項」に対応した モデル案作成の試み—

新山王政和* 滝藤友美**

*音楽教育講座

**附属名古屋小学校

Development of the Instructional Planning Model to Study Various Elements of Music

Making of Plan that Adjusts to "Course of Study (Music)"

Masakazu SHINZANOU* and Tomomi TAKITO**

*Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Nagoya Primary School attached to Aichi University of Education, Nagoya 461-0047, Japan

- 1 学習指導案モデルの作成のスタンス
1. 1 音楽の諸要素を核とするより深い音楽活動
musicの語源であり人間の知的活動を司る女神ムーサの技を意味する“musike”を鑑みると、元々「音楽」が意味するものは「音を楽しむ」や「音で楽（こころよい・たやすい）」よりも、「音を嗜む」に近いものであることがわかる。つまり音楽とは、音を操ってplayやgameを楽しんだり、さらに高いレベルのステージをめざした追求を楽しんだりするものであり、それらの活動を通じて音や音楽の正体や仕組み・仕掛け等に関する知識を身に付けることで音の塊や羅列に音楽的意味や価値を見出し、さらに音の塊や羅列を感情や情動へと変換する技術を身に付けている、と考えられる。この点に於いて新学習指導要領の「共通事項」において取り扱うよう示された「音や音楽を形づくる諸要素」に関する知識や、それを見分け、取り扱うことのできる技術を身に付けさせることが、音楽表現と音楽鑑賞の活動において如何に重要であるのかを示唆している。ただしここでは「正解／不正解」にこだわるのではなく「違いや変化に気付くこと」を大切にしたい。
1. 2 子ども達が生来持っている「音楽の諸要素に対する知覚力」を覚醒させる
日頃気に留めることの少ない楽器以外の音に注目

し、雑音にしか聞こえないような音を意識し直すことにより音そのものが有している性質に気付かせるということは、新学習指導要領の「共通事項」で求められているものと重なる。この「音そのものの性質」とは「音の3要素（音色・音高・強弱）」や「音楽の3要素（リズム・メロディー・ハーモニー）」、そしてこれらが組み合わさって生まれる様々な音楽の要素にも繋がっていくものである。これらの音楽の諸要素を知覚する能力とは、人間が生きる為に身に付けて発達させた「音そのものを聞き分ける能力」であり、後に人類の発達に伴って音を音楽として楽しんだり、そこから喜怒哀楽を感じたり、そこへ自らの感情表現を込めたり、さらにその音と音の組み合わせをアートたらしめる特別な価値観を見出したりするに至ったものである。

音楽の諸要素を知覚し聴き分ける力とは、例外を除いて元々全ての人間が持っているものであるが、成長に伴ってその能力を意識し活用する機会が減ること、少しずつ忘れられてしまいかねない。例えば音色を知覚する力は、母親と他の人間とを区別するために最も早い時期に獲得する知覚力であると言われており、例えば声の大きさや声の高さの変化（抑揚）から相手の精神状態を推理する、車のクラクションの強弱から距離を推し量る、ブレーキ音の高低の変化から身の危険を察知する力などは、元々誰もが持っていたはずである。その生来有していたはずの知覚力が、それ

を意識したり活用したりする機会が減ったことでいつの間にか失われてしまう。このように忘れられ失いつつある音楽の諸要素に対する知覚力を再意識させ覚醒させることが、我々教師と音楽科へ課せられた責務の一つである。なおこの場合も「正解／不正解」よりも「違いや変化に気付くこと」の方がより重要であることを押さえておきたい。

1. 3 より深い音楽活動には言語活動が不可欠

音楽表現に際して演奏者が予め自らの思いや意図などを込めた「聴き手に対するメッセージ」を具現化するためには、音を音楽へと組み立てるための演奏上の工夫や作戦を他の演奏者と共有しなければならず、自ずと言語活動に支えられたコミュニケーション力が求められる。これは音楽鑑賞の際も同じであり、音楽を聴いて楽しむこととは演奏者の思いや意図を想像・予想してそれを具現化するために施された演奏上の工夫や作戦（演奏解釈）を推理することに他ならない。つまり、より優れた芸術性の体得を目指す上では「優秀な演奏者を育てること」と「レベルの高い鑑賞者を育てること」は同義であり、不可分かつ可逆的な関係にある。これは何も考えずに話す人や文字を書いた後から並べ替えて文章にする人がいないのと同じように、演奏者は単に音符を音へ置き換えているのではなく自らの音楽的表現要求というフィルターを通しながら楽譜を音楽へと再変換している。鑑賞者も漠然と音響情報を耳にしているのではなく、自分の好みに合った音色や音楽表現を求めて自らの音楽的・表現的要求と照らし合わせながら聴くことによって、心の中では絶えず様々な情動が沸き起こっているのである。

このように、鑑賞とは音や音楽に対する思考を伴った能動的な働きかけであり、また表現とは制約の中で自己表現を工夫するものである。よって「表現＝演奏、鑑賞＝座って聴く」という既成概念を超えた「演奏しながら自分の音や他の人の音を聴く」、「演奏しているつもりになって聴き取る」等のスタイルの活動が今後よりいっそう工夫されることを期待したい。

1. 4 「感性」の捉え方の整理

教育現場を混乱させている重大な誤解に、「感性＝勘&閃き」と、「感性＝感情」がある。

そもそも「感性」と「勘や閃き」は全く次元の異なるものである。これを同義とすることは、子どもが思い付きの「ノー・アイデア」で書きなぐった絵とピカソが意味や意図等の「メッセージ」を込めて書き上げた絵の価値を同等であると貶めてしまうことに等しい。我々教師に課せられているのは、一見同じレベルに見えたり聴こえたりする楽曲や演奏表現の中に隠された「作者や演奏者の思いや意図」とそれを伝えるための「工夫や作戦」等のメッセージ性を詳らかにし、子ども

達が理解できるレベルに翻訳して説明したり、それを自ら見抜けるよう知識や技術を身に付けさせたりすることであろう。

さらに「感性」と「感情」が同義でもあり得ない。筆者は、感性とは「微妙な音の変化や音遣いの違いを聴き分けるセンサーとしての知覚力」と、それらの「変化や違いが何を意味するのかを推察することのできるプロセッサとしての思考・判断力」とを有機的に関連付け、最終的にそれを「演奏表現へと結び付けることのできる力」だと考える。そして、より多くの人に受け入れられる創造性や独自性とは「知識・技術・経験による99%の裏付けに1%のインスピレーションが加わって成立する」とも言われており、決して単なる閃きや思い付きから生まれるものではない。意識下・無意識下に於ける様々な知識・技術・経験の集積という土台があってこそ、奇をてらわれない、独りよがりでもない普遍的な独自性や創造性が生まれてくる。

本報告では、音楽の諸要素に注目して創造的に音楽に向き合わせるための学習指導案のモデル作成を試みている。これを叩き台として、今後教育現場でも子ども達の「音や音楽を形作る要素に対するセンサーとしての知覚力」を覚醒させたり、それを活用して総合的に思考・判断し演奏表現へ結び付けたりするような学習指導が試みられることを望んでいる。

2 新しい視点からの学習指導案のモデル作成

新学習指導要領の下で行われる学習活動を想定し、新たなモデルとして次のように指導案の作成を試みた。文中、*印を付したものは留意点または注釈であり、それ以外は指導案中のサンプル文章である。

2. 1 題材（単元）設定

「題材：音や旋律の重なりを感じて表現しよう」

*まず「音楽の諸要素」について確認しておく。これは文科省学習指導要領の「共通事項」において表現と鑑賞を横断して取り扱うように示された「音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズ、音の重なり、音階や調（3・4年以上）、音の重なりや和声の響き（5・6年）」等の音楽を特徴付けている要素。そして「反復、問いと答え、変化（3・4年以上）、音楽の縦と横の関係（5・6年）」等の音楽の仕組みのことである。なお中学校では、これに「テクスチャ、形式、構成」が加わる。

*新学習指導要領の下では、これまでの「思いをこめて歌おう」のような感性的・情緒的な活動を目標にした題材や単元ではなく、「思いが伝わるようにリズムやテンポを感じ取って歌おう」のように、子ども達へ気付けたい・聴き取らせたい・身に付けさせたい音楽の諸要素をコア（中心課題）にした授業が多くなる。このように音楽の諸要素をコアにして活動することでそ

の評価も明確になり、例えばこれまでの「思いを込めて歌えた」という抽象的な評価も「思いが伝わるようにリズムやテンポを感じ取って歌えた」のように具体的に明確な評価へと変わり得る。

2.2 教材の設定

表現教材：「ドレミの歌」

(ベギー・葉山作詞／リチャード・ロジャース作曲)

鑑賞教材：「動物の謝肉祭」より「白鳥」

(サン・サンス作曲)

*コア（中心課題）に設定した音楽の諸要素と適切にリンクするような表現教材と鑑賞教材を工夫する。

2.3 題材（「題材観」または「単元観」）の設定

一般的に子ども達は、音楽を感情面から情緒的に捉えて音楽活動へ結びつけることは得意である。しかし、音楽の構成的・要素的な側面から音楽を受け止めることで、音楽の内面へより深く関わるができることや、さらにそこで気付いたことや感じたことを自分なりに工夫して表現する楽しさを体験させてみたい。そこで今回は「音や旋律の重なり」をコア（中心課題）として取り上げて、「表現活動で二つの旋律に気付く」→「鑑賞活動で旋律の重なり面の面白さやその響きを感じ取る」→「気付いたことや感じ取ったことを表現活動で試したり工夫したりする」という三段階のステップを通じて、音や旋律が重なった時の響きや雰囲気、音楽的な効果等に気付かせ、感じ取らせてみたい。

*できるだけ音楽の諸要素に対する興味・関心の度合いや知覚力についても言及するように心がける。

・音や旋律の重なりに興味をもち、その面白さや響きを感じながら進んで学習活動に取り組もうとする。

＜音楽への関心・意欲・態度＞

・音や旋律の重なり面の面白さやその響きを感じ取り、それを表現する歌い方を自分なりに工夫することができる。

＜音楽的な感受や表現の工夫＞

・音や旋律の重なり面の面白さやその響きを、旋律の特徴を生かしながら表現することができる。

＜表現の技能＞

・旋律の特徴が生かされた音の重なり面の美しさを感じ取り、曲を味わいながら聴くことができる。

＜鑑賞の能力＞

*題材を設定した理由とそこで目指したいポイントを述べた上で、題材と「指導要録上の評価の4観点（音楽への関心・意欲・態度、音楽的な感受や表現の工夫、表現の技能、鑑賞の能力）」の関係を示しておく。

2.4 子どもの実態把握（児童観）

このクラスは、大きな声で歌うことが好きな子ども

が多く、音楽の授業を心待ちにしている反面、「大きな声で歌うと気持ちがいい」等の表面的な楽しさだけを求める姿も見られる。よって本題材では、音楽の感性的・情緒的側面へ子どもの目を向けさせて、感じたり気付いたりしたことを自分の言葉で説明し合い、自分の思いを表現できる歌い方を工夫することで、コミュニケーションの大切さにも気付かせたい。その際、「あんな感じ」「こんな感じ」等の感覚的な説明ではなく、音楽や音楽的な言葉を用いてお互いに説明し合うように、言語活動の面からフォローする。

*子どもの性格やクラスの特徴を列挙するだけでなく、例えば「元気に歌えるがクラスの半分はまだピッチに気を配ることができない」や、「感情を込めて歌える子どもも多いがテンポを意識しながら歌うことが苦手である」等のように音楽の諸要素に沿った実態分析をしておく、授業の活動内容や目標が立て易くなる。

2.5 指導計画（5時間完了、本時4/5）の設定

*本題材では、子ども達へ気付かせたい・聴き取らせたい・身に付けさせたいコア（中心課題）を「音の重なり」と設定し、題材全体を通して表現領域と鑑賞領域を関連させながら学習に取り組ませている。

【導入】（1時間）

①「ドレミの歌」を斉唱で歌い、その後、教師が下の旋律を歌うことで音の重なりを意識する。

②上の旋律と下の旋律が合わさった時に感じたことや気付いたことを発表し合う。

③本題材では「音の重なり」について学習していくことを確認する。

*授業の導入に於いて、その日の活動のコアに関する声かけを徹底することで「今日の先生は～に拘っている」と子ども達に感じ取らせる。

*声かけによって「～をやるのかな」のように子どもが授業の方向性を予想できるような「伏線」を張る。

【展開】（3時間）

[表現領域の活動：パートⅠ]

①「ドレミの歌」の合唱の練習をして、それぞれの旋律の重なり具合を楽しみ、音の重なり面の面白さやその響きを感じとる。

②どのように歌うと音の重なり面の楽しさや面白さを表現することができるか、グループごとに試行錯誤しながら「ドレミの歌」の歌い方を工夫する。

③自分や自分達の表現が、旋律の特徴を生かして音を重ねているのか、振り返ってみる。

*声かけによって、活動のコアである「音の重なり」へ意識を向けさせ、違いに気付かせる。

↓

[鑑賞領域の活動]

「白鳥」を鑑賞して、音の重なりやその響き、美しさに気付く。

④「チェロとピアノの重なり」と「音の重なりによる楽曲の面白さやその響き、美しさ」に注目しながら「白鳥」を鑑賞し、感じ取ったことや気付いたことを互いに発表し合っ共有する。

*自身の演奏を冷静に振り返り自分がしていることに気づくことは難しい。他者の演奏を客観的に聴くことで、演奏には様々な工夫があることを聴き取らせる。

↓

[表現領域の活動：パートⅡ]

⑤「白鳥」を聴いて気付いたことや感じ取ったことを思い出す。

⑥「白鳥」を聴いて気付いたことや感じ取ったことと関連させながら「ドレミの歌」を歌う。

⑦「白鳥」を聴いて気付いたり感じ取ったりした「音の重なりによる音楽の面白さやその響き、美しさ」をどうやったら表現できるのか「自分の考え」を持つ。

*前の鑑賞活動で気付いたことや考えたことを具現化するために、様々な演奏表現を試してみるよう促す。

↓

[表現の工夫]

⑧「自分自身の考え」とそれを生かす表現の工夫を発表し合い、他の人の意見や考えと互いに向き合うことで、みんなの意見を共有する。

⑨他の人の意見や考えを基にししながら「自分自身の考え」を確認し直し、自分なりの表現によって「ドレミの歌」を歌う。

*自分と他者の演奏を比較し、演奏に込めた思いや意図を伝え合うことで、表現の工夫をさらに深める。

【活動のまとめ】（1時間）

①本題材で工夫したり試したりしたことを振り返り、何を学習したのかを再確認する。

②本題材で取り組んだ活動を振り返り、音や旋律の重なりによる音楽の面白さやその響き、美しさを味わい、それを表現する方法を工夫する楽しさを再確認して、まとめとする。

*教師が子ども達へ気付かせたい・聴き取らせたい・身に付けさせたいと考える音楽の諸要素を「コア（中心課題）」に設定し、表現と鑑賞の活動が適切にリンクするよう指導計画の全体を工夫する。

2.6 本時（展開）の目標（本時4/5）の設定

①音や旋律の重なりやその響きを感じながら進んで合唱を楽しもうとする。＜音楽への関心・意欲・態度＞

②旋律の特徴を生かしながら、重なり具合を試したり工夫したりすることができる。＜音楽的な感受や表現の工夫＞

③音の重なりを感じたり、旋律の特徴を生かしたりし

ながら歌うことができる。＜表現の技能＞

④白鳥を聴いて音の重なりやその響き、面白さを感じとることができたか。＜鑑賞の能力＞

*教師が設定した「コア（中心課題）」に対して、評価の4観点：「音楽への関心・意欲・態度」、**「音楽的な感受や表現の工夫」**、「表現の技能」、「鑑賞の能力」を対応させながら本授業内の目標を設定する。

2.7 展開の設定

①音楽遊びをしたり、既習曲を歌ったりする

【学習活動：「ウンパッパ」を合唱する】

*本時のコアである「音」へ注目するように声かけをする。また「ウンパッパ」では旋律の重なりにも注目させて、学習課題を子ども達に意識させる。

【学習活動：「白鳥」を、体を動かしながら聴き、鑑賞の活動で感じ取ったことを思い出す】

○予想される子どもの姿

・チェロの旋律に合わせて、ゆったりと腕を動かす。

・ピアノの音に合わせて、手を細かく揺らす。

*「白鳥」では、チェロとピアノの重なりを意識させ、それぞれの特徴を聴き取るように促す。さらに、それぞれの旋律の音楽的特徴を感じ取って、それを表した動作をするように促す。

【学習活動：旋律の音楽的特徴どのように捉えて、何をどのように表現しているのかを発表する】

*「～な動きは音楽のどんな感じを表しているの？」のように問いかけることで子ども達の関心や注目を音楽の諸要素へ向けさせ、学習課題を意識させる。

②旋律の特徴を生かして合唱する。

【学習活動：旋律の特徴をさらに生かして「ドレミの歌」を合唱する】

*旋律の雰囲気や特徴を意識しながら歌うように絶えず声かけをする。

③前時までの表現活動と鑑賞活動で感じ取ったことを関連させて、旋律の重なり方を工夫する。

【学習活動：前時までの表現の活動で考えたことと、鑑賞の活動で感じ取ったことを関連させて、グループごとに「ドレミの歌」の上の旋律と下の旋律の重なり方を工夫する】

○予想される子どもの姿

・上の旋律（8分音符）は一音一音を歯切れよく歌い、下の旋律（2分音符）は滑らかに歌う。

・上の旋律は弾んだ感じで歌い、下の旋律は切れ切れにならないように歌う。

*音や旋律の重なりを意識させ、その響きや面白さを感じ取るように促す。また、思いや意図をもって表現の工夫をしているか、グループを巡回しながら声かけをする。さらに鑑賞の活動で感じ取ったことを思い出

させながら、それぞれの旋律をどのように歌いたいのか拘りを持たせ、表現に取り入れさせる。

*音の重なりを意識させながら合唱させる。

④自分の表現方法を整理し、自分の考えをまとめる。

【学習活動：音の重なりによる音楽の面白さやその響き、美しさを感じ取り、「自分自身の考え」を持つ】

*「子ども達を書ける」学習プリントを工夫する。

*どのように歌うとよかったか、自分自身の考えや疑問等を学習プリントに記述させる。その際に、それぞれの旋律の特徴を生かして音を重ね合わせ、その表現による面白さやその響き、美しさを感じ取り、その感じ取ったことを学習プリントへ記述するよう声をかけて、子ども達の思考を誘導する。

*「教師からの問いかけに答えていく」ことで自然に学習活動の振り返りを導くような学習プリントを工夫する。低学年の場合は、選択肢を用意して選ばせるスタイルや、学年が上がるに従って記述する量を増やしていくのも効果的である。(資料2参照)

【学習プリントの例：表側】

「二つの旋律は、それぞれどんな感じがしたか？」

「二つの旋律が重なり合った時、どんな感じがしたか？」

【学習プリントの例：裏側】

「どのように歌えばよいと思ったか？」

「上の旋律と下の旋律を重ねるために、どんなことを工夫したり、試したりしたか？」

*活動の中で子ども達の思考の流れを、逆に辿ることができる問いかけを工夫し、その思考の流れを遡ってみるように促す言葉や図・絵を用意しておく。

⑤発表し合う

【学習活動：「自分自身の考え」やそれを基に工夫した表現を発表し合う】

*発表者には、「自分自身の考え」の中の旋律の歌い方を述べさせてから演奏発表をさせ、聴取者には演奏発表後に表現から感じ取ったことを説明させる。

⑥全体で合唱する

【学習活動：「自分自身の考え」や工夫した表現を基にしながら、全員で「ドレミの歌」の合唱をする】

*音の重なりによる響きの違いを感じさせながら、全員で表現させるように導く。

2.8 評価規準の設定

*「Ⅵ：本時の目標」に対応させて評価の目安を決める。なお、評価規準Aのレベルは「十分満足できると判断されるもの」、Bは「おおむね満足できると判断されるもの」、Cは「努力を要すると判断されるもの」に設定するよう指導要録で定められているので留意す

る。また授業の指導計画や達成目標を設定する際は、B規準を基本として作成する。

*コア（中心課題）に対応しているかを確認する。

*実際は次に例示したのものから1～2ポイントを抽出して、それぞれにABC規準を設定する。

①音や旋律の重なりやその響きを感じながら進んで合唱を楽しもうとする。

A規準：音や旋律の重なりやその響きを感じ取りそれを自分自身の演奏に取り込むことができる。

B規準：音や旋律の重なりやその響きを感じ取ることができる。

C規準：音や旋律が重なっていることに気付くことができる。

*3段階のランク分けは次の観点に従っている。

C：音や旋律の重なり気付いているか？→B：必要な時に自分の意思でその響きを感じ取れるか？→A：それを使いこなせるか？

②音の重なりを感じたり旋律の特徴を生かしたりしながら歌うことができる。

A規準：お互いに聴き合いながらタイミングを合わせたりバランスに気をつけたりして歌うことができる。

B規準：自分の旋律は自信を持って歌うことができる。

C規準：自分の旋律をなぞりながら歌うことができる。

*3段階のランク分けは次の観点に従っている。

C：歌えるか？→B：自信を持って正しく歌えるか？→A：他のパートを聴きながら歌えるか？

③旋律の特徴を生かしながら旋律の重なり具合を試したり工夫したりすることができる。

A規準：旋律の特徴を生かすためにどのような歌い方をすればよいか、その重なり具合を試したり工夫したりすることができる。

B規準：旋律の特徴を感じ取って、それを生かした自分なりの歌い方を工夫できる。

C規準：旋律の特徴に気付いて、自分なりに歌うことができる。

*3段階のランク分けは次の観点に従っている。

C：旋律の特徴に気づいて歌っているか？→B：旋律の特徴を生かそうとしているか？→A：旋律の重なり具合を試行錯誤しているか？

④「白鳥」を聴いて音の重なり気付く、その面白さを感じとることができたか。

A規準：旋律の音楽的特徴を捉えながら、自分なりの聴き方を楽しむことができる。

B規準：二つの旋律の響き合いを聴き取ることができる。

C規準：旋律の動きに注意しながら聴くことができる

*3段階のランク分けは次の観点に従っている。

C：旋律の動きを聴き取っているか？（旋律の動きに合わせられるか？）→B：二つの旋律の動きを聴き取り、その響き具合を聴き取っているか？→A：音楽の諸要素に従って二つの旋律の関係やその響き具合を聴き取り、それを楽しそうに表現したり他者と語り合ったりしているか？

3 その他の留意すべき事項

- ①音楽活動では「正解／不正解」よりも「違いや変化に気付くこと」の方が大切であることを説明する。
- ②授業の導入に既習曲を歌わせている間に、その日の活動のコア（中心課題）に関する声かけを徹底して「今日の先生は～に拘っている」と子どもが課題を予測できるようにヒントを示すことで、「きっと今日は～をやるんだろうな」というように子どもが授業の方向性を予想できるよう「伏線」を張っておく。例えば「旋律の重なり」をコアにした授業を行う場合、導入の既習曲を歌う場面から「旋律の流れを意識させる、旋律の雰囲気を感じ取らせる、旋律の歌い方に関心を向けさせる」等の声かけをしっかりと行って「気をつけるポイント」を示しておく、意見を出し合う活動場面で子どもから意見が出やすくなる。
- ③子ども達の意見交換から活動へ移る場合、その節目には必ず教師の口で課題や仮説を整理・集約しておく。例えば「いろいろな意見がたくさん出たけど、その中でも〇〇に注目した△△さん達の意見が気になりました。それってどういうことなのかな？どうやって歌えば聴いている人たちへ伝わるのかな？。次にこの部分の歌い方についてグループで考えたり、試したりしながら工夫してみてください」のように、問題点と課題を明確に示して「今から何をやるのか」を全員で押えてから、次の活動へ移るようにする。「どこへ向かって、何をすればいいのか」を子ども自身が分かっていると、活動は活性化することなく深まりもしない。
- ④子ども達に意見を出させる時は「発表も演奏のうちだよ。みんなにしっかり聞こえるように発言して下さい。聞いている人達も真剣に聞いてあげて下さい」のように発表時のマナーを徹底して、「教師と発言者の間だけの閉じたやりとり」にならないように注意する。さらに発表後「今の〇〇さんの意見って、さっきの△△に似ていて□□ってことだと思うけど、それについて皆さんはどう思いますか？」のようにクラス全体へ投げかけることで、個人の意見に対して集団全体で問題意識を持たせて共通理解になるように導く。
- ⑤子どもへ要求する際は、例えば「〇〇はとても難しいよね。だからこそ〇〇ってとても重要だから、是非がんばってしっかり歌って欲しいです」のように、理由と期待感を込めて指示するように心がける。
- ⑥子どもの活動や意見交換が流れすぎる場合は、敢えてその流れを止めることで再確認させたり、思考を深

めさせたり、わざとネガティブな質問をすることでもう一度試してみるように促してみる。

⑦教師が活動のイニシアチブをとる「収束・集約」（説明、支持、問いかけ、まとめ・整理、新たな課題や問題点の提示等）と、子どもが活動の主体となる「拡散」（考える、試す、工夫する、練習する等）を適切に組み合わせ、授業へメリハリをつけるようにする。

4 おわりに

音響現象としての音の塊や音の羅列から人はどのようにして音楽的価値や意味を見出し、そこへ情動を感じるのか、その基盤になっている音楽的な仕掛けや仕組みとはいったい何なのか、これらを考え、聴き取り、感じ取ることができるような活動の試行を期待する。

そしてより多くの人から受け入れられる普遍的な価値を有する芸術作品には、音の並び方（リズム）、音の繋げ方（メロディー）、音の重ね方（ハーモニー）について工夫や作戦があることを知り、その効果を考えたり作曲者の意図やねらいを推理したりすることを繰り返すことで、将来的には自分自身の音楽的要求や情動とのすり合わせを通じて自らの音楽的嗜好にまで高めていくような活動を望みたい。そのためにも、まず音楽の諸要素を感じ取り聴き分ける力を確実に身に付けさせることをめざした授業に取り組むことを望んでいる。その際、繰り返しになるが「正解／不正解」よりも「違いや変化に気付くこと」の方が大切である。

本報告では、音楽の諸要素と創造的に向き合わせる学習指導試案の作成と、鑑賞分野において能動的にそれらと向き合わせる「評価シートのサンプル」（資料2）の作成を試みた。今後教育現場に於いてもこれらを叩き台として、子ども達の「音や音楽を形作る要素に対するセンサーとしての知覚力」を覚醒させ、それを総合的に思考・判断したり演奏表現へ結び付けたりするような指導が試みられることを期待している。

参考文献および資料

- *梅本堯夫「子どもと音楽、シリーズ人間の発達2」、東京大学出版会、1999
- *坪能由紀子・伊野義博「小学校学習指導要領の解説と展開」、教育出版、2008
- *加藤徹也・他「音楽科教育実習ここがポイント中等科編」、音楽之友社、1996
- *新山王政和「言語活動の充実と音楽科」、初等科音楽教育研究会編「初等科音楽教育法・小学校教員養成課程用」、p.134、音楽之友社、2009
- *新山王政和「言語活動の充実と音楽科」、中等科音楽教育研究会編「中等科音楽教育法・中学校教員養成課程用」、p.136、音楽之友社、2009
- *教員養成セミナー 2008年4月号別冊「学習指導要領はこう変わる！中教審答申で読み解く改訂案」、時事通信社、2008
- *文部科学省「小学校学習指導要領解説音楽編」、教育芸術社、

2008

*文部科学省「中学校学習指導要領解説音楽編」, 教育芸術社,
2008

(2009年9月11日受理)

資料1 「小学校・音楽科 学習指導案のモデル」

第4学年〇組 音楽科学習指導案

平成〇年〇月〇日 (〇) 第〇時間目

場 所：音楽室

指導者：T.

I 題材（「単元」を用いる場合もある）

「音や旋律の重なり」を感じて表現しよう

II 教材

表現教材「ドレミの歌」（ベギー・葉山作詞／リチャード・ロジャース作曲）

鑑賞教材 組曲「動物の謝肉祭」より「白鳥」（サン・サーンス作曲）

III 題材について（「題材観」や「単元観」を用いる場合もある）

一般的に子ども達は、音楽を感性的・情緒的に捉えて音楽活動へ結びつけることは得意である。しかし、音楽の構成的・要素的な側面から音楽を受け止めることで、音楽の内面へより深く関わることができること、さらにそこで気付いたことや感じたことを自分なりに工夫して表現する楽しさを体験させたい。そこで今回は「音や旋律の重なり」を題材に取り上げて、「表現活動で二つの旋律に気付く」→「鑑賞活動で旋律の重なり面の面白さやその響きを感じ取る」→「気付いたことや感じ取ったことを表現活動で試したり・工夫したりする」という三段階のステップを通じて、音や旋律が重なった時の響きや雰囲気、音楽的な効果等に気付かせたり、感じ取らせたりする。

・音や旋律の重なりに興味をもち、その面白さや響きを感じながら進んで学習活動に取り組もうとする。

＜音楽への関心・意欲・態度＞

・音や旋律の重なり面の面白さやその響きを感じ取り、それを表現する歌い方を自分なりに工夫することができる。

＜音楽的な感受や表現の工夫＞

・音や旋律の重なり面の面白さやその響きを、旋律の特徴を生かしながら表現することができる。＜表現の技能＞

・旋律の特徴が生かされた音の重なり面の美しさを感じ取り、曲を味わいながら聴くことができる。＜鑑賞の能力＞

IV 子どもの実態（「児童観」を用いる場合もある）

このクラスは、大きな声で歌うことが好きな子どもが多く、音楽の授業を心待ちにしている反面、「大きな声で歌うと気持ちがいい」等の表面的な楽しさだけを求める姿も見られる。よって本題材では、音楽の感性的・情緒的側面へ子どもの目を向けさせて、感じたり気付いたりしたことを自分の言葉で説明し合い、自分の思いを表現できる歌い方を工夫することで、コミュニケーションの大切さにも気付かせたい。その際、「あんな感じ」「こんな感じ」等の感覚的な説明ではなく、「音楽や音楽的な言葉」でお互いに説明し合うように、言語活動の面からフォローする。

V 指導計画（5時間完了、本時4/5）

本題材では、題材全体を通して「音の重なり」を扱い、表現領域と鑑賞領域を関連させて学習に取り組ませる。

段階	時配	学 習 活 動 の 流 れ
導入	1	①「ドレミの歌」を斉唱で歌い、その後、教師が下の旋律を歌って音の重なりを意識する。 ②上の旋律と下の旋律が合わさった時に感じたことや気付いたことを発表し合う。 ③本題材では「音の重なり」について学習していくことを確認する。

段階	時配	学 習 活 動 の 流 れ (つづき)
展開	1	<p>[表現領域の活動1]</p> <p>①「ドレミの歌」の合唱の練習をして、それぞれの旋律の重なり具合を楽しみ、音の重なり の面白さやその響きを感じとる。</p> <p>②どのように歌うと音の重なりを楽しむことや面白さを表現することができるか、グループご とに試行錯誤しながら「ドレミの歌」の歌い方を工夫する。</p> <p>③自分や自分達の表現が、旋律の特徴を生かして音を重ねているのか、振り返ってみる。</p>
	1	<p>[鑑賞領域の活動]</p> <p>「白鳥」を鑑賞して、音の重なり面白さやその響き、美しさに気付く。</p> <p>④「チェロとピアノの重なり」と「音の重なりによる楽曲の面白さやその響き、美しさ」に 注目しながら「白鳥」を鑑賞し、感じ取ったことや気付いたことを互いに発表し合っ て共有する。</p>
	本時	<p>[表現領域の活動2]</p> <p>⑤「白鳥」を聴いて気付いたことや感じ取ったことを思い出す。</p> <p>⑥「白鳥」を聴いて気付いたことや感じ取ったことと関連させながら「ドレミの歌」を歌う。</p> <p>⑦「白鳥」を聴いて気付いたり感じ取ったりした「音の重なりによる音楽の面白さやその響 き、美しさ」をどうやったら表現できるのか、「自分自身の考え」をもつ。</p> <p>⑧「自分自身の考え」とそれを生かす表現の工夫を発表し合い、他の人の意見や考えと互い に向き合うことで、みんなの意見を共有する。</p> <p>⑨他の人の意見や考えを基にしながら「自分自身の考え」を確認し直し、自分なりの表現で 「ドレミの歌」を歌う。</p>
整理	1	<p>①本題材で工夫したり試したりしたことを振り返り、何を学習したのかを再確認する。</p> <p>②本題材で取り組んだ活動を振り返り、音や旋律の重なりによる音楽の面白さやその響き、 美しさを味わい、それを表現する方法を工夫する楽しさを再確認して、まとめとする。</p>

VI 本時の目標（本時4 / 5）

＜音楽への関心・意欲・態度＞

音や旋律の重なりとその響きを感じながら、進んで合唱を楽しもうとする。

＜音楽的な感受や表現の工夫＞

旋律の特徴を生かしながら、重なり具合を試したり工夫したりすることができる。

＜表現の技能＞

音の重なりを感じたり、旋律の特徴を生かしたりしながら歌うことができる。

＜鑑賞の能力＞

白鳥を聴いて音の重なりに関心、その面白さを感じることができる。

Ⅶ 展 開

学 習 活 動	○教師のかかわり ・ 指導上の留意点
<p>1 音楽遊びをしたり、既習曲を歌ったりする。</p> <p>・「ウンパッパ」を合唱する。 ・「白鳥」を、体を動かしながら聴き、鑑賞の活動で感じ取ったことを思い出す。</p> <p style="text-align: center;">【期待する子どもの様子】</p> <p>○チェロの旋律に合わせて、ゆったりと腕を動かす。 ○ピアノの音に合わせて、手を細かく揺らす。</p> <p>・それぞれの旋律の音楽的特徴をどのように捉えて、何をどのように表現しているのかを発表する。</p> <p>2 旋律の特徴をさらに生かして「ドレミの歌」を合唱する。</p> <p>3 前時までの表現活動で考えたことと、鑑賞の活動で感じ取ったことを関連させて、グループごとに「ドレミの歌」の上の旋律と下の旋律の重なり方を工夫する。</p> <p style="text-align: center;">【期待する子どもの表現方法】</p> <p>○上の旋律（8分音符）は一音一音を歯切れよく歌い、下の旋律（2分音符）は滑らかに歌う。 ○上の旋律は弾んだ感じで歌い、下の旋律は切れ切れにならないように歌う。</p> <p>4 音の重なりによる音楽の面白さやその響き、美しさを感じ取り、「自分自身の考え」をもつ。 ・それぞれの旋律の特徴を生かして音を重ね合わせ、その表現による面白さやその響き、美しさを感じ取り、その感じ取ったことを学習プリントへ記述するよう声をかけて、子ども達の思考を誘導する。</p> <p style="text-align: center;">【学習プリントの例：表側】</p> <p>「二つの旋律は、それぞれどんな感じがしたか？」 「二つの旋律が重なり合った時、どんな感じがしたか？」</p> <p>5 「自分自身の考え」と表現を発表し合う。</p> <p>6 「自分自身の考え」を基にして、全体で「ドレミの歌」の合唱をする。</p>	<p>○本時のコアである「音」へ意識を向けるように声かけをする。 ・「ウンパッパ」は旋律の重なりを意識させる。 ・「白鳥」はチェロとピアノの重なりを意識させ、それぞれの特徴を聞き取るように促す。</p> <p>○それぞれの旋律の音楽的特徴を感じ取って、それを表した動作をするように促す。</p> <p>○「～な動きは音楽のどんな感じを表しているの？」のように問いかけることで、子ども達の関心や注目を音楽の諸要素へ向ける。</p> <p>○旋律の雰囲気や特徴を意識しながら歌うように声かけをする。</p> <p>○音や旋律の重なりを意識させ、その響きや面白さを感じ取るように促す。</p> <p>○思いや意図をもって表現の工夫をしているか、グループを巡回しながら声かけをする。 ・鑑賞の活動で感じ取ったことを思い出させながら、それぞれの旋律をどのように歌いたいかの拘りを持たせ、表現に取り入れさせる。 ・音の重なりを意識させながら合唱させる。</p> <p>○どのように歌うとよかったか、自分自身の考えや疑問等を学習プリントに記述させる。 ・「問いに答えていく」ことで自然に学習活動の振り返りを導くような発問を工夫する。 ・低学年は選択肢を用意して選ばせるスタイルや、学年が上がるに従って記述する量を増やしていくスタイルを工夫する。</p> <p style="text-align: center;">【学習プリントの例：裏側】</p> <p>「どのように歌えばよいと思ったか？」 「上の旋律と下の旋律を重ねるために、どんなことを工夫したり、試したりしたか？」</p> <p>○発表者には、「自分自身の考え」の中の旋律の歌い方を述べさせてから発表させ、発表後に表現から感じ取ったことを述べさせる。</p> <p>○音の重なりによる表現のその響きを感じさせながら、全体で表現させる。</p>

Ⅷ 評価規準の設定例

- ①音や旋律の重なりやその響きを感じながら、進んで合唱を楽しもうとする。
 A規準：音や旋律の重なりやその響きを感じ取り、それを自分自身の演奏に取り込むことができる。
 B規準：音や旋律の重なりやその響きを感じ取ることができる。
 C規準：音や旋律が重なっていることに、気付くことができる。
- ②音の重なりを感じたり、旋律の特徴を生かしたりしながら歌うことができる。
 A規準：お互いに聴き合いながら、タイミングを合わせたり、バランスに気をつけたりしながら歌うことができる。
 B規準：自分の旋律を、自信を持って歌うことができる。
 C規準：旋律をなぞりながら歌うことができる。
- ③旋律の特徴を生かしながら、旋律の重なり具合を試したり工夫したりすることができる。
 A規準：旋律の特徴を生かすためにどのような歌い方をすればよいか、その重なり具合を試したり工夫したりすることができる。
 B規準：旋律の特徴を感じ取って、それを生かした自分なりの歌い方を工夫できる。
 C規準：旋律の特徴に気付いて、自分なりに歌うことができる。
- ④白鳥を聴いて音の重なりに気付き、その面白さを感じとることができたか。
 A規準：旋律の音楽的特徴を捉えながら、自分なりの聴き方を楽しむことができる。
 B規準：二つの旋律の響き合いを聴き取ることができる。
 C規準：旋律の動きに注意しながら聴くことができる。

資料2 「鑑賞用評価シート」のサンプル

- *子どもが書けないのではなく「書ける内容の工夫」や「書かせるための工夫」が足りなかったのでは？
- *鑑賞とは、音や音楽に対する「思考を伴った能動的な働きかけ」である。
- *表現とは、制約の中で自己表現を工夫するものである。
- *正解／不正解ではなく、違いや変化に「気付く」ことを大切にさせる。

音楽の正体を推理しながら、曲のパズルを解きながら聞いてみよう♪ 好きな項目に、自由に書き込んでみましょう。		
音の高さが	だから、曲が	と思った／感じた
リズムが	だから、曲が	と思った／感じた
楽器の音色が	だから、曲が	と思った／感じた
音の重なりが	だから、曲が	と思った／感じた
曲のテンポが	だから、曲が	と思った／感じた
旋律が	だから、曲が	と思った／感じた
音の強弱が	だから、曲が	と思った／感じた
楽器の重なりが	だから、曲が	と思った／感じた